

2026 年度 入学者選抜試験問題

外国人留学生

外国人留学生編入

外国人留学生別科

小 論 文

注意

1. 監督者の指示があるまで、問題用紙を開かないこと
2. 解答はすべて解答用紙に記入すること
3. 監督者の指示に従い、所定欄に、受験番号・氏名を記入すること
4. 机上には筆記用具・消しゴム・鉛筆削り・時計および受験票以外のものを置かないこと

受 験 番 号	氏 名

次の〔課題文 A〕〔課題文 B〕のうちどちらか一つを選びなさい。

選んだ課題文の設問 (1) (2) について、それぞれの答えを該当する解答用紙に記入しなさい。

[課題文 A]

以下の文章は、ある研究者が自身の「清掃行政」研究の原点と、現場に根ざした研究姿勢について述べた文章である。よく読んで次の2問に答えよ。

(1) 筆者の問題提起が伝わるように、文章全体を 400 字程度で要約せよ。

(2) 生活者と清掃行政との関わり方について、あなたはどのように考えるか。自らの生活体験を踏まえて考え、400 字程度で記述せよ。

2016年に清掃行政¹⁾の研究を始めてから今年で9年目になる。清掃について全くの素人であった筆者が、現場に飛び込んで清掃車に乗務して業務を体験し続け、また、清掃事業について知りたいと思った現場に赴いて学び続けてきた結果、現在では清掃現場のことを知る研究者として知られる存在となり、さらには世の中に清掃事業の現状を発したり、講演会で壇上にあがったりするようになってしまった。

この本の読者の皆さんは筆者のことを「ごみ学者」と思っているかもしれない。それはそれで光栄なのだが、筆者の研究分野は地方自治論、行政学であり、そこに軸足を置き、清掃行政を研究しているという立場である。

筆者が清掃行政を意識したのは、2008年に社会人学生として入学した大学院のゼミの最初の授業で、故今川晃先生から研究手法について解説を頂いた時である。今川先生は、「どんな理論も実践から構築されている。(師である)佐藤竺先生も、自分も、実践から理論を構築する研究スタンスをとってきた。このようなアプローチをとる研究者は他にもいて、早稲田大学の寄本勝美先生はごみ収集車に乗務して、実際に収集作業をしながら清掃行政の研究や職員参加の研究をなされた」と言われた。

え？何？大学教員がごみ収集？筆者に大きな衝撃が走った。「研究は机の上に難解な本を広げ眉間に皺を寄せて読みながら進めるもの」とイメージして大学院に入学していたが、それが音を立てて崩壊した瞬間であった。このインパクトは今でも忘れられない。

この時から筆者は「現場」を意識するようになった。筆者も今川先生と同様のアプローチを採り、地域で起こっている問題を具(つぶさ)に観察していく手法で研究しようと決意した。地べたを這いつくばる調査²⁾を重ねて博士論文を執筆して学位を頂いた後、縁があり2015年4月に大東文化大学に職を得ることができ、44歳で大学教員に転身し研究者生活が始まった。

当時は大東文化大学の採用面接と同時に全日本自治団体労働組合(自治労)が募集していた「次世代を担う研究者」(2年契約)にも応募していた。そこでは、「檜舞台で目覚ましい活躍をする『スーパー公務員』ではなく、全く目立たないがしっかりと自治体行政を支えている人たちに着目して地方自治を語りたい」と自らの意思を伝えていた。

採用されたところまでは良かったのだが、檜舞台を支えるために日々募然に働いておら

れる方々がいる職場に入る機会に恵まれず、月日が経過していった。一年後の進捗報告会で報告できるまともな成果がなく相談したところ、自治労のネットワークを利用して新宿区職員労働組合に話をつけて頂き、区行政の実務の現場に入れるように道を作って頂くことができた。

新宿区職員労働組合の方から「どの部署に入りたいのか？」と問われた際に、筆者は迷わず「清掃の部署に入りたい」と答えた。清掃部署に確認のうえで、そこから頂いたのは「すぐにでも来て良い」という返事であった。これにより念願のごみ収集車への乗務が実現することとなった。このような形で実現するとは思ってもせず、夢のようであった。

2016年6月から翌3月までの10ヵ月間、新宿区の新宿東清掃センターに週一回通い、清掃車に乗務して現場を学んでいった。雨の中の収集、炎天下での収集、寒空の下での収集を経験した。ごみ汁を被ったこともあるし、怪我をしかけたこともあった。ごみについては全くの素人であったが、この調査で業務や業界にかなり精通するようになり、清掃行政について語れるまでになった。また、清掃職員の皆様との絆ができ、多くの清掃関係者との人脈ができた。筆者は一つ一つの縁を大切にし、一生つきあうつもりでいる。

このように筆者の清掃への入り口は行政直営による収集の現場であったが、その後も清掃への興味は高まるばかりで、もっと知りたいという思いから、様々な方々のご協力を得ながら積極的に現場を見て回ることを続けた。事業系のごみの行方、資源収集されるペットボトルのリサイクル、清掃事業におけるDX、清掃事業で活躍する女性、清掃車から流れる音楽、災害廃棄物の対応に駆けつける清掃職員、雪の中での過酷な収集等、情報提供を頂ける方々から貴重なお話を伺うとともに、可能な限り現場体験や現場見学をさせてもらい、清掃事業を「地べた」からしっかりと見て、ある程度は理解を深めたと自負している。おそらく、ここまで清掃事業の現場を知り得た研究者はいないのではないかと考えている。

ところで、家庭や事業で生じたごみは、決められた日時に出しておけば持って行ってもらえる。ルールに基づいて排出しておけばいつの間にか視界から消えてなくなっているため、排出したごみがその後どうなるのかはそれほど意識されていない。またそのごみを処理したり処分したりするためにたくさんの人々が関わっていて、その人たちがどんな現場で、どのような思いで仕事をしているのか、さらには、どんなご苦労をされているのかも多くの人々には理解されていない。人々にとって「ごみ」は不要なものであるもので、関心が及ばず、それどころか清掃事業を見下してきたといっても過言ではない。

地方自治体においても同様に、ごみ収集を「誰にでもできる仕事」だと位置づけ、民間会社に業務委託して人員を削減していく「改革」を行ってきた。2001年に発足した小泉純一郎内閣は「官から民へ」、「中央から地方へ」をスローガンとし、2004年には行政改革を構造改革の重要な柱の一つと位置づけた。これを受けて総務省は2005年に各地方自治体に対して積極的な行政改革に努めるように促した。これまで地方自治体が策定してきた行政改革大綱を見直し、2005年から5年間にわたる「集中改革プラン」の策定を求めた。これにより定員削減（公務員減らし）が厳しく推進され、地方自治体の職員数は相当数

絞られた。中でもごみ収集をはじめとする現業職については、民間委託でも置き換えが可能だと浅はかにも判断され、技能労務職員の削減が進んでいった。

その後も清掃事業を見下す流れや、地方自治体の現業職の民間委託化が行政改革であるという認識が浸透し続けたが、その流れを断ち切るかに見えたのがコロナ禍であった。私たちの日常生活を支えるための公共サービスを対面にて直接的に住民に提供している点から、清掃従事者は「エッセンシャルワーカー」³⁾であるとされ、注目を浴びるようになった。そして感謝の意を伝えようとごみ袋に励ましのメッセージを貼る現象が全国的に生じ、清掃事業は一躍世間から注目される業務となった。

しかし、それはほんの一時的な現象であった。今では「エッセンシャルワーカー」という言葉は死語になったかのようである。そして人々の清掃事業への関心も薄れていったようである。筆者の想定していたとおり、清掃事業への人々の関心は一過性のものであった。世間が清掃事業に興味を示さなくなった今、清掃への理解者を増やしていくことや、清掃事業への参加者を増やしていくことは、意義深い取り組みになると考える。そして、そのために私自身の清掃事業の調査で知り得た知識が役立てば光栄だと切に思っている。

(藤井誠一郎『ごみ収集の知られざる世界』(2024)より抜粋し一部改変)

1) 清掃行政

ごみの収集・処理などを含む行政サービスの一分野。

2) 地べたを這いつくばる調査

現場に深く入り込んで行う実地調査の比喻。

3) エッセンシャルワーカー

社会生活に不可欠な仕事に従事する人(例:医療、物流、清掃など)。

[課題文 B]

以下は秋田県でのクマの出没状況と、それに対する人間の対応について取材した文章である。よく読んで次の2問に答えよ。

(1) 下記の文章で、筆者が伝えたいことを 400 字程度で要約せよ。

(2) あなたは、これまでに暮らしたことのある地域で、人間と野生動物の関係について気になったことがあるか。自然との共生について、あなたの経験や考えをふまえて 400 字程度で記述しなさい。

「増える出没、クマと人のすみ分けをどう考える 秋田でクマの生息地を訪ねて」

※著作権処理の都合により、非掲載となります。

(松村北斗「増える出没、クマと人のすみ分けをどう考える 秋田でクマの生息地を訪ねて」『森林環境 2025』(公財森林文化協会)を一部改変)